

レーベレヒト・ミッゲと「緑」のアヴァンギャルド

田村 和彦*

Leberecht Migge and Avantgarde Gardening

Kazuhiko TAMURA

要旨：レーベレヒト・ミッゲ (Leberecht Migge, 1881-1935) は 20 世紀初めから戦間期にかけて活躍したドイツの庭園設計家である。造園術はバロック時代から建築学の下位分野として位置づけられてきたが、20 世紀初めには公園緑地など、都市のオープンスペースの設計や、大規模な住宅開発にもかかわるようになる。その先駆者のひとりがミッゲで、個人の庭をはじめ、公共施設の緑地、公園、田園都市、ジードルング (集合住宅)、墓地にいたるまで、緑地にかかわるさまざまなプロジェクトに関わり、きわめて大胆な提案を行った。「緑のミッゲ」と評される所以である。この論文では、ミッゲの独自の緑地観を「社会的緑 (地)」(das soziale Grün) という概念を根に掘り起し、それが戦間期ドイツにおいてどのような意味を持っていたかを解明する。特に注目したいのは、B. タウト、M. ヴァグナー、E. マイら建築家との協働で設計された大規模なジードルングで、ミッゲの理念はそこで部分的に実現された。ほかにもバウハウスの建築家とのかわりにも言及する。

Abstract :

Leberecht Migge (1881-1935) is a German garden and landscape architect (Gartenarchitekt), who was active from the early 20th century to the interwar period. Landscaping was assumed to be a sub-discipline of architecture since the Baroque period, but at the beginning of the 20th century it became involved in the reform movement. One of the pioneers of the garden reforming is Migge, who was committed himself to various projects related to green spaces, ranging from private villa gardens to open spaces, Garden Cities, and Siedlungen after 1920s. This width of range of his proposal and his polemical position among the garden designers and the architects is why he is described as “Grüner Migge”. In this paper, Migge’s original view of garden-landscape is investigated with the fundamental concepts of “soziales Grün” (social green space) and “siedeln” (to settle), and is elucidated what it meant in Germany between the wars. Specially focused is here design and concept of open space of Siedlungen in collaboration with architects such as B. Taut, M. Wagner, E. May and M. Elsaesser, where Migge’s conception of landscape planning was partially realized. His relationship to the architects of Bauhaus is also discussed.

キーワード：戦間期ドイツ、造園、都市計画、レーベレヒト・ミッゲ

*関西学院大学国際学部教授

I レーベレヒト・ミッゲと造園改革

レーベレヒト・ミッゲは当時ドイツ領であったダンチヒ（現ポーランド、グダニスク）で1881年に生まれた。ハンブルクでの研鑽ののち、同地の著名な庭園設計事務所オルクス社に勤務して多くの造園設計に関わったミッゲの初期の仕事は主に個人の邸宅や別荘の庭園の設計であったが、やがて公園や墓地など、大規模な公共緑地の設計を手がけるようになる。

ミッゲの活動は19世紀末から20世紀初頭にかけ提唱される「造園改革 Gartenreform」の動きを受けたものだった。Gartenreform とは、19世紀半ばから進行する建築や工芸部門の改革に連動した庭園の改革運動であるが、そこで庭は従来のように住居や建物の付属設備や装飾物とみなされるのではなく、それらと一体化した生活空間としてとらえられる。さらに、公園のような大規模な公共緑地も、従来の装飾的美観を重視するものから、生活空間の延長として、機能性と実用性を重視したものへと設計し直される。この改革が当時、学芸や美術などの領域だけでなく、衣・食・住・健康衛生など人間の生活全般を、近代化と大衆化が進行する時代環境の中で新たにとらえ直すとする「生活改革」Lebensreform の一環を成していたことも見ておかねばならない。造園の領域でこの改革運動を先導したのがアルフレート・リヒトヴァルク（1852-1914）で、美術史家でハンブルク美術館の館長でもあった彼は、造園を建築・都市計画・美術工芸と密接に関連した、人間にとって好ましい生活空間をデザインする総合的な芸術としてとらえようとする。庭は自然の不完全な模倣ではなく、人間の手の加わったひとつの「作品」として評価されるようになる。1896

年にドレスデンで開催されたのを手始めに、各地で頻繁に開催される造園展覧会は、建築家や造園家が新たな造園の実例を実地に提示する場となった¹⁾。また、伝統的な美意識に基づく従来の公園緑地に替わって、機能性と有用性を重視した新しいタイプの公園であるフォルクスパルクが次々と計画されていくのもこの時期からである²⁾。

専門領域としての造園についていえば、ドイツでは19世紀末まで造園術 Gartenkunst は建築術の下位概念として位置づけられ、独立した芸術分野とはみなされなかった。庭師（Gärtner）は、園丁もしくは園芸家で、少数の王宮付属庭園の監督官を除けば、設計にまでは関わらないのが通例であった。それに対し、造園改革運動はなによりも庭園設計を「芸術・工芸」部門に関連付け、さらに造園家を庭園の設計から施工までを担当する専門的技術者として独立させようとするものであった。ドイツ工作連盟 Deutscher Werkbund の設立者の一人、ヘルマン・ムテジウス（1861-1927）がイギリスのアーツ・アンド・クラフツ運動に影響を受け、カントリーハウスをドイツに紹介するに際して、住宅と庭を一体のもの（総合芸術）としてとらえていたことも、この改革運動の発端となった。

その際注目したいのがガルテンアルヒテクト Gartenarchitekt という呼称である。「庭」と「建築家」を合成したこの語は、ドイツ語圏に特有の概念で、現在は個人の庭の造園だけでなく、土木工事や植栽を通じてランドスケープデザインに関わる事業の計画から施工までを手がける専門職の造園設計家を指す概念として一般化しているが、実際には20世紀初めの造園改革運動と関連して普及した概念である³⁾。この呼称は職業としての造園設計家⁴⁾が建築家と対等であることを示す

1) 大規模な造園展は、これ以降ハンブルク（1897年）、デュッセルドルフ（1904年）、ダルムシュタット（1905年）、マンハイム（1907年）など、各地で開催される。

2) 同じ時代に進行した公園緑地の改革については、田村和彦「フォルクスパルクの思想」〔関西学院大学『国際学研究』Vol.7, No.1, 2018年、3-14頁〕を参照。

3) Gartenarchitekt という言葉は、啓蒙期の美学者ズルツァーによる使用例（1778年）があるが、造園家については18、19世紀を通して Gartenkünstler という呼称が一般的だった。Gartenarchitekt という呼称を積極的に使い始めたのは、ミッゲを含む一連の改革家たちで、1913年にはこの職業名を冠する同業者団体、ドイツ造園設計家連盟 Der Bund Deutscher Gartenarchitekten（BDGA）が設立された。

4) 造園設計における建築学的な側面を強調する後藤文子氏は Gartenarchitekt に「植栽建築家」という訳語を提

ともに、彼らの行う造園設計が建築と同じように、庭およびそれに連なる緑地一般の「空間構成」を行う作業であることを示す。この場合、形容詞の *architektonisch* は「建築的」というより、設計に際しての「構成的」な原理に関わるものと考えたほうがよい。具体的にはそれは、住居や建築物が用途に応じて様々な空間に仕切られるように、庭や緑地の空間を仕切り、さまざまな要素を組み合わせることで構成する方法や技術を指す。造園設計家はこの方法に基づいて、個人の庭から公園、さらには景観までを緑地空間としてとらえ、それを切り分け、要素を組み合わせることで全体へと統合する空間デザイナーとしての役割を担うのである。

ミッゲ自身がこの造園設計家を自任した。1913年に刊行された『二十世紀の庭園文化』⁵⁾は、庭空間のデザイナーという立場から、同時代に進行する庭園改革を、個人の邸宅の庭園、公園などの緑地、公共施設の空地利用、墓地、さらに田園都市まで（また庭に置かれる調度や施設や植栽の利用法も含めて）豊富な事例をあげて紹介するとともに、旧来の庭園観とは異なる発想に立つ、現代の市民生活に適合した新しい庭や緑地のあり方を提唱する。庭の空間が現代の人間にとって不可欠であると説くミッゲによれば、人間には普遍的にして平等な「庭への欲求」が原初から備わっている⁶⁾。この欲求は人々が都市に集まり、生活が近代化・機械化するにつれて余計に高まるが、装飾性や美観を重視した従来の庭園はこの欲求の高まりにとうてい応えることができない。必要とされるのは、万人のために開かれた十分な広さを持つ庭である。

そうした「開かれた庭」の筆頭に挙げられるのがフォルクスパルクである。ミッゲ自身がライプチヒのマリアンネンパークを初め、20世紀初頭に始まった大規模な公園の設計に携わっている

が⁷⁾、そこに示されるのは、飾りや目の保養の目的ではなく、日光浴、大気浴、ダンスやスポーツ、水遊び、子供の遊戯など、さまざまな身体活動に対して開かれた「実用品」としての庭の空間である。先に挙げた「建築的・構成的」な原理は、多様な用途に添って広大な緑地の空間を切り分け、構成するために使われる。その際重視されるのは、単純さ、実用可能性、採算性という三つの原理である。

公設公園であるフォルクスパルクをオープンスペースとして民衆の多くの需要のために開放する考えは、この時代の公園設計者が共有するものであったが、ミッゲは『二十世紀の庭園文化』で公園施設に限らず、都市の緑地および空地をすべて利用可能な「庭」として評価し、立地や機能、改良の余地、緑地相互の組織だった連結の可能性について詳細かつ包括的な分析と提案を行っている。それだけではない。ミッゲによれば「万人のための庭」を開設することは人類の進歩と幸福のために不可欠であり、その開発は、当時 6500 万人の人口を擁するに至ったドイツが経済的、社会的ならびに精神的活動の全精力を傾注して取り組むべき国民的課題とされる。『20 世紀の庭園文化』は、ドイツを造園改革において世界をリードする「庭の国」として位置付け、全国土を最も貧しい者たちもかかわることができる花咲く庭で覆うという壮大な構想で締めくくられている。「われわれは多くの、そして人を幸せにする庭の民族であろうではないか。これこそ、20 世紀の庭文化のあらたな、そして重要な意味なのだ。」⁸⁾

II ジー ドルングの思想

全ドイツを庭で覆うという造園改革の構想はしかしまもなく頓挫する。言うまでもなく 1914 年からの第一次世界大戦の開始と、ドイツの敗戦のためである。四年に及ぶ消耗戦の末、敗戦国とな

ㄨ 案している。（後藤文子「植栽建築家をめぐる『気象芸術学』試論 チャールズ・ダーウインからミース・ファン・デア・ローエへ」三田哲学会編『哲学』131 集、2013 年 3 月、181-203 頁、うち 198 頁。また、後藤氏によれば、この概念は 2000 年以降、モダニズム建築の見直しに際して重視されているという。同上、201 頁。

5) Leberecht Migge: Die Gartenkultur des 20. Jahrhunderts. 1913

6) Die Gartenkultur des 20. Jahrhunderts. S.150 f.

7) ほかに Wacholderpark (Hamburg-Fuhlsbüttel) など。

8) Die Gartenkultur des 20. Jahrhunderts. S.157

ったドイツが蒙った人的資源、社会的インフラの損傷は甚大であった。ドイツの国土面積そのものが、ヴェルサイユ条約に基づく割譲で 13 パーセント減少し、人口の十分の一が失われた。巨額の賠償金を支出するための財政負担により、開戦前に緒についた各地のフォルクスパルクの設営も中断する。こうした事情が国土の庭園化というミッゲの構想を大きく躓かせたのはもちろんである。

むしろ敗戦による国土の荒廃と国民生活の激変は、より差し迫った社会的課題の解決に向けて造園改革の方向転換をミッゲに迫ることになる。すなわち、食糧供給の逼迫、住宅問題の悪化、そして失業である。まず食糧供給についていえば、第一次大戦において対戦国イギリスの海上封鎖によって海外からの食糧の供給を絶たれたドイツは、開戦直後から食糧難に見舞われ、特に 1916 年から 17 年にかけての「カブラの冬」と呼ばれる欠乏期には一般市民の餓死者が 70 万人以上にのぼった⁹⁾。敗戦後もこの窮乏状態は深刻であった。住宅問題と失業についても同様で、19 世紀後半からの都市への人口集中による地価高騰の結果生まれた「賃貸兵舎」（ミーツカゼルネ）と呼ばれる四、五階建ての高層集合住宅の密集状態は、敗戦後、新たに都市に流入する帰還兵や失業者、無宿者の増大のため、むしろ悪化の一途をたどる。

ミッゲはこうした喫緊の問題を解決するために、庭に戦略的な役割を与える。庭による都市の脱中心化、ないしは解体である。敗戦による失業、食糧不足、住宅難は、なによりも都市が本来かかえる矛盾の激化として受け止められた。それは戦前からあった、都市の環境とその文化に対する批判を高めさせる。敗戦間もなく、1918 年にミッゲが「緑のスパルタクス」という筆名で発表

した「緑のマニフェスト」¹⁰⁾は都市に対する決別と、新たな生存原理としての「田園 Land」の礼賛から始まる。いわく、「都市は前世紀の生存理念」であり、「工業と技術、商業と国際取引、富と享楽を謳歌しながら、悲惨と退廃にまみれた都市は滅びた」。そこは過酷な生存競争の舞台であり、貧困、失業、住宅の不足、飢え、そして戦争はその帰結である。都市が前世紀の廃れた原理であるのに対し、20 世紀の原理は田園であり、それは都市の解体を促進する原理でもある。いまや都市文化ではなく、田園と都市を仲介する都市－田園文化 Stadt-Land-Kultur が築かれなければならない¹¹⁾。都市批判とその反動としての田園礼賛は、都市化が急速に進行した 19 世紀後半から存在していたが、敗戦による国土の荒廃がこの傾向を後戻りのきかないものにしたことは間違いない。「社会的緑地」とは都市を田園とつなげるための具体的手段なのである。

田園による都市の解体をこの時代に主張したのはミッゲだけではない。たとえば建築家のブルーノ・タウト（1880-1938）は 1920 年の風変わりなスケッチ集『都市の解体』で、都市を古い廃れた原理とし、新時代の原理は「大地」への帰還であると宣言する¹²⁾。「大地は良き住まい」という副題をもつこの本をタウトは、人間の住まいが廃墟と化した都市を離れて小農園の広がる郊外の田園へと放散する様を上空から俯瞰した自らのスケッチで埋め、この沃野が地球的な規模にまで広がる田園都市のユートピア的なヴィジョンを紡ぎ出している¹³⁾。

ミッゲにおいて特徴的なのは、都市を解体する「社会的緑化」の具体的な方法として入植活動をあげていることである。その根拠のひとつは土地

9) 藤原辰史『カブラの冬 第一次世界大戦期ドイツの飢饉と民衆』2011 年、人文書院

10) Das grüne Manifest は最初、1918 年に Die Tat 誌に掲載された。(Die Tat, X, 1918-19, S.912-919.) その後、注 11) のミッゲの著書『ドイツの内的植民』1926 年の冒頭に掲げられる。「マニフェスト」からの引用はこれに従っている。

11) Leberecht Migge: Deutsche Binnenkolonisation – Sachgrundlagen des Siedlungswesens. 1926 1999 年の新装版は Der soziale Garten. というタイトルだが、Jürgen von Reuß によるあとがきがつけられているのを除けば、内容、ページ数ともに 1926 年のものと同一である。

12) Bruno Taut: Die Auflösung der Städte. 1920

13) タウトだけではなく、「新建築」やバウハウスの建築家たちも、外気や陽光に対して開かれたまったく新たなデザインの住宅設計を通じて、広い意味でこの「都市の脱中心化」という課題に共通して取り組んでいたことを見ておかなければならない。

改革運動にある。19世紀末からはじまるこの運動は、大土地所有制において土地所有者が自ら耕さない農地や土地から利子や賃料を得ることを宗教的・倫理的罪惡としてとらえらるとともに、それが資本主義経済の急速な拡大とともに累積する貧困、搾取、失業といった社会的矛盾の原因となっていることを批判する。都市への人口集中も、大土地所有制により農村の放棄を強いられた農民の流入によるものである。土地改革運動は土地の占有を様々な社会問題を生む温床ととらえ、最終的には国や共同体による土地収用や法的制限という手段を通じて土地の公共的使用を促進しようとする。この運動は、多くの改革家の支持を受けながら現実的な成果を得ないままに終わる¹⁴⁾。しかし、土地改革の思想に鼓舞されて、19世紀末から20世紀初頭にかけてのドイツでは、都市を離れて郊外に農地を拓き、共同生活を送る入植者グループが多数生まれた¹⁵⁾。キリスト教主義的、菜食主義的、トルストイ主義的、さらに民族主義的なものも含めて、これらの生活改革の志向をもつ入植活動も、「都市批判」という文脈ではミッゲの提案と同じ軌道に乗っている。

土地問題に対してより急進的な主張を掲げたのは、ロシアの無政府主義的な思想家ピョートル・クロボトキン（1842-1941）の影響を強く受けたアナルコ・サンディカリズムである。クロボトキンによれば、生産手段である農地を地主や資本家から奪取して共有化することは、生産手段を奪われた労働者にとって生存をかけた戦いである。「パンの篡奪」というスローガンは、あらゆる生産手段の私的所有権の没収と、生産手段としての土地の共同所有と相互扶助に基づく農耕と手工業によって営まれる田園コミュニティの樹立をめざすものだった。実際、クロボトキンをドイツに紹介

した急進的な社会主義者グスタフ・ランダウアー（1870-1919）は、その著書『社会主義同盟』（1908）で社会主義ないしは無政府主義にもとづく協同組合的な入植活動を提唱している。ちなみに、先に挙げたタウトの『都市の解体』の後半部は、都市を批判し、田園生活を礼賛する多くの作家家からのおびただしい数の引用から成り立っているが、クロボトキンの『パンの篡奪』や『農地・工場・工房』からの引用はその三分の一を占める。

これに関連して重要なのは、大戦後にミッゲが提案する入植活動が、ヴォルプスヴェーデを拠点として開始されることである。北ドイツ、ブレーメン郊外のヴォルプスヴェーデのコロニー、バルケンホフはユーゲント様式の画家ハインリヒ・フォーゲラー（1872-1942）が19世紀末に移住し、彼を中心に数多くの画家や詩人たちが移り住んだ芸術家村として名高いが、第一次大戦中から政治的な志向を強め、私有財産制を廃して手工業者による協同組合的なコミュニティによる社会革命を目指す急進的な左翼の集合地となる。ここで主導的となったのは、資本家の巣窟である都市における革命活動は破壊と解体しかもたらさないと、田園への移住と、そこにおける農業と手工業に活路を見出そうとするクロボトキンとランダウアーの思想である。ミッゲも1918年にここに移り住み、フォーゲラーらと活動を共にする。ドイツの環境保護思想の起源を探究したウルリヒ・リンゼの『生態平和とアナキー』には、1921年1月にバルケンホフで行われた社会主義的傾向の「ドイツ入植者会議」においてミッゲと急進的な自然保護論者パウル・ロビン（1882-1945）とが、民衆蜂起による土地の全面的「占拠」か農地の「効率的利用」かをめぐって激しい論争を繰り広げるエピソードがある¹⁶⁾。ミッゲが入植地での集約的栽

14) 1920年のワイマール憲法155条において、ドイツ人一人一人に「健康な住まい」を提供することを目的に、私的な土地所有や世襲を制限し、土地とその自然産出力は公益のために使われるべきことが謳われたのは、土地改革運動のひとつの遺産といえる。ただし、土地の世襲制度はヒトラー政権下で復活し、実際にはドイツでは日本の「農地解放」にあたる大土地所有制、世襲制の解体は第二次大戦後のソビエトの介入を待たなければならなかった。

15) 世紀転換期から1920年代にかけての様々な志向や政治的傾向を持つ田園コロニーおよびコミュニティについては以下を参照した。Anne Feuchter-Schawelka: Siedlungs- und Landkommunebewegung. in: Diethart Kerbs und Jürgen Reulecke (hrsg.): Handbuch der deutschen Reformbewegungen 1880-1933. 1998, 227-244

16) ウルリヒ・リンゼ『生態平和とアナキー』法政大学出版局、101-103頁 原著はUlrich Linse: Ökopax und Anarchie. Eine Geschichte der ökologischen Bewegungen in Deutschland. 1986

培農業に基礎を置く自給経済を提唱するのに対し、ロビーンはミッゲの方法を体制内的で手ぬるいものとしてその「ブルジョア性」を批判する。ブルジョア性はともかく、ミッゲの関心が敗戦後のドイツにおいて解決を要する食糧問題、住宅問題、失業などの喫緊の課題を、クロボトキンとランダウアーの思想的影響下で、入植活動によって平和的に解決することに向けられていたことは確かである。

そのためにミッゲが独自の意味で使用するのが、ジーデルン *siedeln* という概念である。この語は通常は、「新しい土地に居を定める」「定住する」「入植する」という意味で使われる。*Siedler* は入植者であり、*Siedlung* は開拓地、入植地を指すが、後者は 1920 年代以降は都市周辺などに新たに開発された集合的な住宅地や団地の建物を目指すようになった。(これについては、タウトやヴァグナーら建築家との協働について扱う際に取り上げる。) ミッゲは、本来、新しい領土の開拓である「入植」を、都市の領域と田園とをつなげる園芸的な耕作活動としてとらえなおす。それは荒れ地の開墾ではなく、都市住民が近郊の土地の耕作と集約的な園芸によって食糧生産を行うことで、都市の脱中心化を促進する活動である。食糧の生産拠点であるばかりでなく、住居をそなえた生存拠点でもある個々の庭＝入植地をつなぎあわせ、組織化していくことで、都市と近郊の間には交流と循環が生まれ、都市は土地とのつながりを取り戻すというのである。

この計画の実現と普及のためにミッゲはヴォルプスヴェーデへの移住後間もなく、近隣に 18 モルゲン（約 5.4 ヘクタール）の土地を借り、そこに入植者のための実験・研修農場ゾンネンホーフ（「太陽農場」）と「ヴォルプスヴェーデ入植者学校」を開設する。フォーゲラーがこの地に開設した手工業者のための無政府主義的な労働学校に併

設されたことから、当初この学校が都市を牛耳る資本主義の解体という政治的な意図を持っていたことは明らかである¹⁷⁾。小住居付きの研修農場は個人の営農に任される小区画に仕切られ、全体は緩い関係の協同組合的互助組織として運営される。入植者学校の目的は、自給自足的な小規模営農者の育成による自律的植民活動の促進と、それを支える集約的園芸技術の開発ならびにその普及である。ミッゲはここを拠点に戦間期を通じてドイツの国土全体の「内的植民地化」というプロジェクトに取り組む。

「内的植民」(*Binnenkolonisation*) とは、文字通りドイツ国内における植民活動を指すが¹⁸⁾、この時代の文脈では政治的に見てそれが、国外に領土を求める植民地主義的な外的拡張主義への反対表明であったことも重要である。ミッゲによれば、戦争によって荒廃した国土と国内経済、さらに国民生活の立て直しこそが最優先されるべきで、「内的植民」は瓦解した国民経済を下から、また内部から更新することで、食糧不足のみならず、貧困、貨幣経済、過酷な生存競争、分業による社会的不平等といった、さまざまな焦眉の問題を解決する方策となりうる。ゾンネンホーフにおける 8 年の経験を踏まえて 1926 年にミッゲが出版した『ドイツの内的植民』は内的植民活動の実態を、集約的園芸技術、国民経済の効用、住居、公共事業の緑地政策との連結などについて、多くの実例をあげて広報する啓蒙的な書物である¹⁹⁾。ミッゲの提唱する植民活動の核となるのが、都市近郊において集約的農法によって個人の耕作する自給自足的な小規模農園である。小規模な土地に技術を投入して高度利用することで最大限の収穫をあげる集約農業に関する知識をミッゲは中国や日本の農法に学んでいる。さらにミッゲは、灌漑方法や糞尿の肥料としての利用についても、東洋の農法からヒントを得ている²⁰⁾。

17) フォーゲラーはこの労働学校を共産主義に基づくレーテ（労働者・兵士評議会）の育成組織として設立した。ただし、ミッゲはのちにフォーゲラーらのレーテ思想から離反する。

18) 「内的植民」そのものは 18 世紀のフリードリヒ大王の時代からプロイセンで頻繁に行われた。その主な目的は荒れ地の開墾による零細農民の定住の促進であった。

19) *Deutsche Binnenkolonisation. Sachgrundlagen des Siedlungswesens*. 1926 この本はドイツ田園都市協会の叢書のひとつとして出版された。

20) *Leberecht Migge: Die wachsende Siedlung nach biologischen Gesetzen*. 1932 S.10-17

興味深いのは、こうした自給自足的な小規模園芸のモデルをミッゲがクラインガルテンに見出していることである。クラインガルテンは19世紀なかばにライプチヒで誕生した小規模な賃貸式の菜園であるが、20世紀初頭には都市内部の人口膨張をうけて、借地ばかりではなく、空き地や未利用の公共用地を利用した膨大な数のクラインガルテンがベルリンなどで発生する。『20世紀の庭園文化』でも、都市内部の私的な庭の例として、クラインガルテンが真っ先に紹介されている²¹⁾。一区画が200㎡から500㎡のクラインガルテンは、菜園として利用されるだけでなく、多くの場合仮小屋をそなえ、貧困層の一時的、もしくは長期にわたる住居にもなった。特に戦間期にこれらの菜園は窮乏する食糧を補うための生産緑地として、また無宿者や住宅に困窮する失業者とその家族のための仮住まいの住居として利用された。

ミッゲはクラインガルテンを生産と居住を兼ねた庭園の原型とみなし、それをモデルに自給自足的な小規模菜園の「タイプ」を提示する。大戦直後の1918年に「新しい庭作りによるジードルンゲ問題の解決」と銘打って出版された『だれもが自給生活者』²²⁾はその普及のためのパンフレットで、集約的農法によって自らの手で耕す庭を余すところなく利用して最大の収穫を得ることが可能な食糧自給の方法を詳細かつ具体的に紹介している。この小冊子は戦争直後の極端な食糧難を解消する福音として版を重ねた。(図1)

クラインガルテンをモデルとするとはいえ、ミッゲの提案する自給式菜園は余暇を利用して間に合わせに需要をおぎなう素人園芸を目的とはしていない。それは集約的農法によって最大限の収穫をあげるために、配置から構造までを計算しつくされた高機能の菜園である。200㎡から500㎡の面積を持つ菜園²³⁾は、幾何学的な長方形で、防風と集熱のために南に面して設置されたプロテクティヴ・ウォールと呼ばれる胸ほどの高さのある壁沿いに設置され、この壁と生け垣によって四方を囲われている。空間はどこも無駄に使われるこ

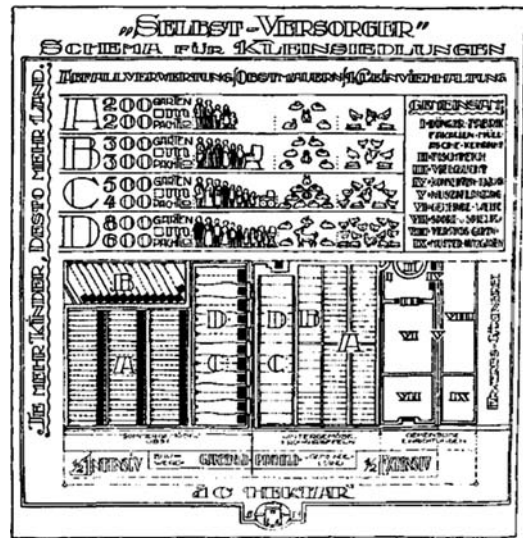


図1 ミッゲ『だれもが自給生活者』より。小規模菜園の図解。

10ヘクタール規模のクラインガルテン集落を例示して家族の人数に応じて面積の異なる、四つのプランが示されている。ここではウサギ、ヤギ、鶏などの飼育も自給経済の中に取り入れられている。

とがなく、集熱用の胸壁沿いには果樹が、生け垣には食用の実のなる低木が植えられる。温室や苗床を使用した高度な農業技術が導入されているのも特徴だが、最大の特徴はこの庭に住居が設けられ、そこで暮らす人間の生活からうまれる廃棄物や糞尿を再利用する自己完結した有機的循環システムが作られていることである。人間の排泄物をふくむ有機物の循環を実現するためにミッゲは、下水を土壌に戻す地下パイプ、糞尿を肥料化する乾式トイレ（Metroklo）や、塵芥を効率的にバイオマスに変えるコンポスト（Dungsilo）を独自に開発している。

ミッゲが個人の耕す小菜園を入植地の最小単位とみなすのは、それが公共政策による上からの土地改革や緑地敷設ではなく、自助努力によって営まれる「万人のための庭」だからである。それはだれもが自ら耕すことができ、だれもがその生態的循環に関与し、だれにとっても福祉と利益を生み出す「社会的緑地」の最小単位である。都市住

21) Die Gartenkultur des 20. Jahrhunderts. S.7-12

22) Jedermann Selbstversorger. Eine Lösung der Siedlungsfrage durch neuen Gartenbau. 1918

23) 営農の種別や家族構成に応じて面積が変わる。

民でもある耕作者たちは、「食糧自給」を通して都市の固い殻を「ほぐし」、大地とのつながりを取り戻す先兵である。『20世紀の庭園文化』ではいささか抽象的・観念的であった「ドイツ全土を庭で覆う」というヴィジョンは、クラインガルテンをモデルにした循環式自給菜園を核にすることで実現可能なものとなる。

『ドイツの内的植民』ではこの高機能の庭が量産可能な標準的「タイプ」として提示され、これらの庭を組織化することで「社会的緑地」のネットワークを拡大してより規模の大きな住宅地や集落、さらに都市計画の中にそれを組み込む構想が示される。自給式菜園において試された有機物の循環は、集合住宅地や都市においても考慮されなければならない。ミッゲの提案の中には田園都市の構想も含まれるが、それは緑あふれる住環境を保障する衛星都市ではなく、農業による生産機能を備えるとともにゴミや下水、糞尿を有機物として再利用する循環的な都市である。(図2)

III 「成長する家」

ミッゲの提案のうち、いくつかは実現され(ただし部分的に)、いくつかは実現されないままに終わった。地方自治体において部分的に実現された例としては、グリェンベルクとキール市郊外のホーフハマー地域の都市計画(1921-26)がある。ほかには、公園の周縁に大規模なクラインガルテンの集落を配置して公共緑地と長期契約される賃借式菜園の相互利用をはかるプランは、現実的なものとして都市計画に取り入れられた²⁴⁾。大規模なプロジェクトの実現を阻んだのは、第一次大戦後のドイツ国内の時代的経済的、社会的状況の変化である。農業の生産力の向上によって、自給的な食糧生産はそれほど喫緊の課題ではなくなった。一方で、1929年の大恐慌によるすさまじいインフレは、大規模な公共事業そのものを不可能にする。

ただし、こうした時代の変転の中でも、庭と住居に関するミッゲの基本的な考えは変わらなかった。それは一言で言えば、庭を主とし、住まいを

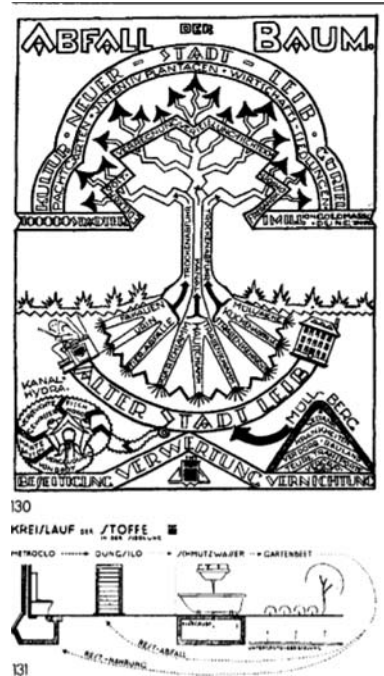


図2 Apfelbaum (リンゴの樹) をもじった、Abfallbaum (ゴミの樹) Siedlungs-Wirtschaft. 5, 1923, S.125 より

地面の下には廃棄物をゴミとして捨てる都市の経済生活が、上には廃棄物や下水を循環的に再利用して周辺部に肥料として供給する新たな循環型都市の構想が示されている。

下の図は個人の菜園における糞尿を含む下水及び廃棄物と作物との循環を示している。

従とする考えである。庭は単なる装飾物ではなく、「社会的緑地」として実用的な生産拠点であるべきだと考えるミッゲの当初からの立場からすれば、それは当然であろう。しかし20年代から始まる建築家たちとのジードルングをめぐる共同作業において両者の考えの差はむしろ鮮明になる。

造園設計家としてのミッゲの名をもっとも高めたのは、戦間期に大規模な公営集合住宅を手がけたマルティン・ヴァグナー(1885-1957)、ブルーノ・タウトら建築家たちとの協働である。ことわっておけば、この場合のジードルングは先に扱った「入植活動」を指すのではなく、狭い意味での、1920年代から都市における住宅問題を解決

24) ベルリンのフォルクスパルクであるレーベルクやリュストリンゲンの例がある。

するために公益事業として着手された低所得者もしくは労働者向けの一連の大規模な集合住宅地をさす。ミッゲは当初からこれらのプロジェクトに関わり、ヴァグナー、タウトのほかにも、多くの建築家と協働して公共住宅地の緑地や植栽、および緑地計画について提案を行っている²⁵⁾。なかでも最も著名なのは、タウトが設計し、1925年から31年にかけてヴァグナーが役員であるベルリンの共益住宅・貯蓄・建設会社（GEHAG）が施工したブリッツのプロジェクトで、馬蹄形集合住宅を中心とした33ヘクタール以上におよぶ敷地に3期にわたって合計2000戸の住居を擁する集合住宅を建設する計画にミッゲは造園プランナーとして参画した。

もちろん、建築家たちと造園家ミッゲの連携は、両者の間に庭を初めとする外部空間の扱い方に親和性があったからこそ可能だったといえよう。たとえば、マルティン・ヴァグナーはすでに1915年の博士論文で「衛生緑地」という概念を導入して都市における空地利用の可能性を論じている²⁶⁾。当時の「新建築」の理論家でもあった建築史家ジークフリート・ギーデオンの『解放された住まい』によれば、戦間期に生まれた新時代の住宅の要諦は、従来は閉ざされていた壁やファサードを外部に向けて「開く」ことであり、「光、空気、開口部」がその原理である²⁷⁾。タウトにも「屋外住空間」Außenwohnraumという考えがある。これは単に庭とかバルコニーではなく、ジードルングの個別の住宅や家並みが空間構成において本質的に含んでいる外部の空間を指し、住居そのものが屋外の共同体的な空間に対して開かれていることを示す。ただしそこは「衛生的緑地」同様、住人の視覚的・心理的に慰安をもたらすこと

で、健康に資するものではあっても、生産を行う空間ではない²⁸⁾。

またバウハウスを代表する建築家のひとり、ル・コルビュジエにも建物を庭や外部空間へ開くことの強い志向がある。屋上に設けられた庭園やテラス、広い開口部、建物を地面から柱で浮かせたピロティもその技法である。コルビュジエによれば、「風景や緑地、花や樹木は建物を介して導入されなければならない。この策略（ピロティ）をもって、建物の下部は光で満たされることになる」²⁹⁾。ミッゲは『ドイツの内的植民』でもコルビュジエに触れ、都市内部の多層住宅に大きな窓やヴェランダ、青天井の開口部を設けるその大胆な試みを図版や写真を掲載して紹介している³⁰⁾。ただし、ミッゲによればコルビュジエの建築は、屋内空間に対して建物を覆う「外被」が過剰である。

フランクフルト・アム・マインのレーマーシュタットおよびブラウンハイムの集合住宅は、ミッゲにとって建築家との協働による大規模なジードルング設計の最後のものになったが、ここでもミッゲは妥協を余儀なくされた。他のジードルングに比べれば、フランクフルトでは各戸の住民が耕作することができる生産機能を持つ用地が確保されていたものの、住居と菜園のある敷地は一部では切り離され、住民は耕作のために菜園に通ってこなければならなかった。しかも各戸あたりの耕作用の庭は110から150m²で、休養や片手間の園芸には十分でも、生産拠点にするには狭すぎた。ここをはじめ、彼の関わるジードルングに実際に住むのが、低賃金もしくは無職の住宅困窮者ではなく、耕作を生活の糧とする必要のない、生計に余裕のある人々であることも彼の想定外であ

25) ミッゲと協働した他の建築家としては、アドルフ・ロース（ウィーンのホイペルク住宅地）レオポルト・フィッシャー（デッサウ、ツィービックの住宅地）、オットー・ヘスラー（ツェレ）、エルンスト・マイおよびマルティン・エルゼッサー（フランクフルト・アム・マインの新都市計画）が挙げられる。

26) 「衛生緑地」とは、ウィーンの建築家カミロ・ジッゲが「装飾緑地」と対比して使った概念で、マルティン・ヴァグナーはこの概念を援用した。田村「フォルクスバルクという思想」7頁を参照。

27) Siegfried Giedeon: *Befreites Wohnen. Licht, Luft, Öffnung*. 1929

28) ミッゲはベルリンにあったタウト個人の住宅の庭を設計している。ここには小規模だが菜園は設けられている。Bruno Taut: *Ein Wohnhaus*. 1927. (12. Garten).

29) Charles-Édouard Jeanneret-Gris (Le Corbusier): *Une maison - un palais*. 1928 p.156

30) *Binnenkolonisation*. S.56 f, S.84-86

った。

新建築へのミッゲの不满は、それが「大地」とのつながりが十分でないことに向けられる。ミッゲにとって、住居は庭に付属するとともに、大地に組み込まれているものである。ベルリン市の建築監督官であったマルティン・ヴァグナーが呼びかけた展示会「成長する家」³¹⁾に、ヴァグナーをはじめグロピウス、タウト、プレツィヒら並みいる建築家に混じってミッゲが出品したモデルハウスもこの考えに基づいている。1931年に開催されたこの展示会の趣旨は、1929年の世界恐慌後の壊滅的な経済状況下で逼迫する住宅問題の解決のために、最低限の費用で建築可能で、将来の家族状況や経済状況に応じて規模や構造を変えることができる簡易な小住宅の見本を持ち寄ることだった。ミッゲの提案は中でももっともラジカルなものだった。それは住居と庭とは空間的にも、技術的にも完全につながっていなければならないというミッゲの当初からの理念を体现する、ミニマルな住居と生産性のある庭のコンビネーションというプランである³²⁾。テラスを合わせても25 m²ほどしかない物置小屋のように簡素な形状の平屋住居はクラインガルテンの仮小屋に近い。ヴォルプスヴェーデのモデル菜園の設計どおりに、東西軸の南面した壁に接して建てられるこの住居は、季節や目的や用途、またそこに住み、耕す住民の能力や必要量、家族の規模に応じて、規模と構造を変更でき、居住面積は最終的には70 m²にまで拡張されうる。悪化した経済状況を待たなくとも、住居が人間の生活と共に「成長」するのは、ミッゲにとって当然のことだった。居間がテラスと同一平面にあり、そのまま庭と連続していることも重要で、家は居住空間というより、むしろ庭という生産空間の一部としてとらえられる。「家付きの庭」であって、「庭付きの家」ではない。ミッゲ自身の説明によれば、「ここに展示される家はそもそも家ではない。これは入植地の

一部を成す住まいであって、綿密に計画された、土地に基づいた生産の有機的構成要素である。この家は地面から、土壌からの収穫物とともに成長する家であり、耕作の方法と分かちがたく結びついている。これこそ失業者、短期労働者、副業として営農する都市入植者にふさわしい住まいである。』³³⁾

家が外観を変えるだけではなく、植物のように「成長する」のは、それが生物学的法則に即って、土地の一部に有機的に組み込まれているからである。ここには、建築や耕作を含めて、人間の営みのすべてが自然環境としての土（土壌）を介して行われる巨大な生物学的連鎖の中に取り込まれている、とする独自の考え方が示されている。ミッゲはすでに第一次大戦前からこの考えを抱いていたが、それを庭と住居の設計において展開するうえで大きな影響を与えたのは、ラオウル・フランセ（1874-1943）であった。フランセはオーストリア＝ハンガリー帝国の植物学者、微生物学者、また自然哲学・文化哲学者で、ヘッケルらの一元論的な生命観・自然観を背景に多数のポピュラーサイエンス的な著作によって当時広く知られた著述家であるが、ミッゲとの関係で特に注目されるのは『土壌の中の生命』である³⁴⁾。この本では、土壌中の顕微鏡レベルの微生物をはじめ、ミミズ、昆虫、菌類、さらに植物などの生物によって土の中で営まれる生命活動が数多くの図版と共にクローズアップされる。またこの生命活動が光、水、空気といった気象を介して地上の動植物の生命活動に連結して、地球規模の物質交換（熱、元素、炭素、窒素、リン酸）の循環を作り上げていることが示される。とりわけ、生物の残骸が生物学的過程（腐敗、発酵、分解）を経て他の動植物に再利用されるサイクルは、人間の生活から出た残滓や排泄物を循環して再利用するミッゲの自給自足農法の発想に大きな影響を与えたことは間違いない。温室や灌漑システムを利用してこの循環

31) Das wachsende Haus der Stadt-Landsiedlung. Berlin.

32) Martin Wagner: Das wachsende Haus. Ein Beitrag zur Lösung der städtischen Wohnungsfrage. Berlin/Leipzig 1932, この本は前年の展覧会のカタログとして出版された。ミッゲのプランもこのカタログに掲載されている。

33) Das wachsende Haus. S.88.

34) Raoul H. Francé: Edaphon, das Leben in Ackerboden. Untersuchungen zur Ökologie der bodenbewohnenden Mikroorganismen. 1913 (Edaphon とは「土壌微生物群」を指す生物学用語である。)

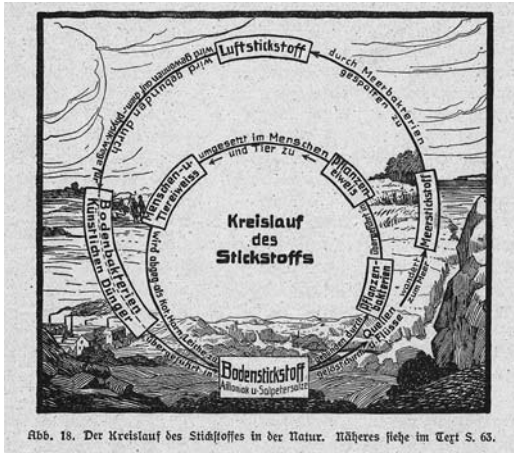


図3 ラオウル・フランセ『エダフォン、土壤中の生命』より。

窒素が土壤中のバクテリアや植物によって仲介され、空気、水、光を通じて自然界で循環していることを図示している。

を促進する生物工学的なアイデアも、ミッゲはフランセに負っている³⁵⁾。循環的経済のサイクルは、仮小屋と菜園のレベルまでミニマルに縮小することもできるし、自己完結した個々の要素を有機的につなぎ合わせることで、集合住宅地や都市の規模にも広げうる。こうしてジードルンは、都市の内部を耕地化することで、そこに生物学的循環を取り戻す営為となるのである。(図3)

ミッゲが『ドイツの内的植民』において、郊外や遠隔地での大規模な耕地開発やそこで展開される営業的な大農法を批判しているのも、それが生物学的循環を作りださないことによる。むしろ大農法と分業はこの循環を断ち切り、消費地と離れた土地で作物の栽培のために費やされた土壤中の成分は、奪われるだけで土地に戻されることはない。土地の持つ生産力(地力)は衰えるだけで、復活することはない。一方、消費地である都市では食物の残渣は塵芥として、ヒトの消化後の排泄物は「汚物」として廃棄されるばかりで再利用されることはない。この循環を取り戻すために、まず最小規模での自給自足の生産と有機物の再利用

が始められなければならない。であればこそ「家よりも土壌が優先される」のであり、家は土壌からの収量に応じて「植物のように」³⁶⁾成長するのである。

土地や土にかかわる戦間期の思想といえば、すぐにナチズムの「血と土」のイデオロギーが思い浮かべられる。のちにナチスの食糧農業大臣となるヴァルター・ダレが唱導するこのイデオロギーは、土を民族の実存的・精神的基盤として犯しがたいものとし、土とアーリア民族の「血統」との神秘的な結びつきを強調するが、ミッゲのジードルンの思想はこれとは折り合わない。土壌は「だれもが棲みつくことのできる」場所であって、そこに労働と技術的手段を投入して食糧を確保することができる即物的対象である。「血と土」では血統を保つ農民による共同体と世襲制農地が神聖視されるのに対し、ミッゲが想定するのは都市住民であり、「内的植民」の目的は彼らが都市とその近郊を自らの手で耕地と化すことである。ここには土壌を神秘化する農業的ロマン主義と呼ぶべきものはみあたらない。

その意味で、ミッゲの提案している自給用菜園がおしなべて幾何学的長方形であることにも注意を向けたい。すでにみたように、このタイプの菜園はヴォルプスヴェーデの「入植者学校」で編み出されたものだが、胸壁と生け垣で四面を囲まれた同じタイプの「モデル菜園」が数十、時には百以上も規格化された工業製品のように整然と敷地を埋めるのは奇観である。見ようによって実用一点張りで無味乾燥とも受け取られかねないこの光景は、徹底した民主主義と合理主義を示すともいえる。なによりもそこは食糧難において効率的な生産が求められる場所であり、廃棄物がすべて土に戻されて有機的な循環が促進される場所である。個々の庭は付属する小住宅と共に、住民がそこで独立して生きる自足的な生存の拠点として設計されている。(図4)

35) ミッゲのフランセからの生物学的思考の影響については、David H. Haney, *When Modern was Green. Life and Work of Landscape Architect Leberecht Migge*. 2010. pp.105-108 この本はミッゲの生涯と業績を初めて包括的にあつかったモノグラフィーである。

36) Wachsendes Haus S.88.

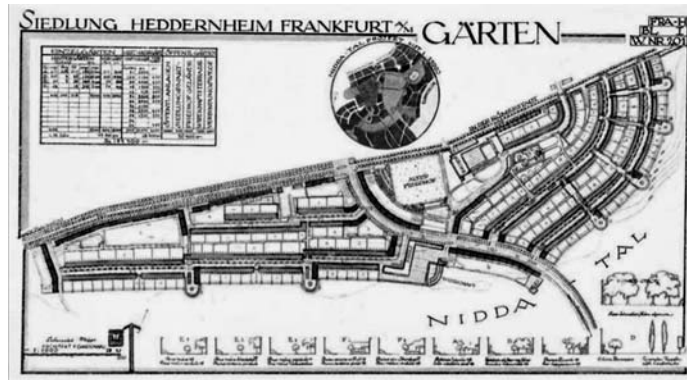


図4 フランクフルト・アム・マイン、レーマーシュタットでのエルンスト・マイとミッゲによる住宅造成（1925-30年）の計画図。
Gartenschöheit, 1928, S.49 より
整然と区画されたモデル菜園が敷地を埋めるほか、設置される自給式菜園の仕様も細かく指示されている。

む す び

生存の拠点としての庭といえば、ミッゲの生涯もそうした場所で締めくくられた。

ミッゲは1932年にベルリン南東、ブランデンブルクとの境にある湖、ゼディンゼーの小さな島をケペニツク区から借りて、その北部を塵芥で埋め立てて造成を行い、居住用の家と耕地を設ける。ヴォルプスヴェーデの入植者学校の支所でもあったこの島は、ミッゲにとって新生活の場であり、終焉の地ともなった。最後に手がけたフランクフルトの集合住宅と緑地化計画が財政的理由から半ばで打ち切られたのち、ミッゲはベルリンの住まいを引き払って、エルンスト・マイの後を引き継いでフランクフルトの新都市計画を担当していた建築監督官マルティン・エルゼッサー（1884-1957）の妻エリーザベトとその5人の子供を伴ってこの島で、ヴォルプスヴェーデで開発した通りの自給自足の共同生活を始める。エリーザベトには夫が、ミッゲ自身にも妻と4人の子供がいたが、彼らとは離れた生活であった。居住用の家は先の「成長する家」展に出品したものほど狭くはなく、二階建てではあったが、温室を建て増しただけの簡素なものだった。（図5）

ブランデンブルク特有の沼地に取り囲まれた草だらけのこの島で、都市を離れて自然環境と直接対峙して行われる自給自足の実践は、未開地を切り拓く入植活動の原点といえよう。塵芥を埋め立てた島をミッゲはゾンネンインゼル（太陽の島）と名付け、1935年の死去まで、（エリーザベトは46年まで）そこで自給生活を続けた³⁷⁾。

働き、食べ、消化し、排泄するという人間の基本的な生の営みが循環するひとつの独立した生活空間がここにも成立していた。それをレーベンスraum（Lebensraum 生活圏、生命圏）と呼ぶのをいまだに躊躇させるのは、この言葉がもっぱら外地侵略的な連想を招く用語になってしまったからである。1920年代から広がったその用法が想定する *Leben* とは、一般的な「生命」や「生活」ではなく、ドイツ民族、それも敗戦によって国土を大幅に削り取られた民族の生活であり、生活空間とはドイツ民族が生き残ることを口実に、他の民族や国土から奪い取る領土である。

ならば、生の営みをより普遍化するために *biotope* ビオトープという言葉を使ったらどうだろうか。*bios*（生命）+ *topos*（場所）、すなわち言葉の原義においての「生命の場所」。この言葉はドイツの生物学者フリードリヒ・ダール（1856-

37) ミッゲとエリーザベト・エルゼッサーがこの島で営む自給生活を記録した当時のホームムーヴィーを多用して製作されたドキュメンタリー映画 *Die Sonneninsel*（*The Sun Island*, 2015年）がある。著名な映画学者でもある監督のトーマス・エルゼッサーは、マルティンならびにエリーザベト・エルゼッサーの孫にあたる。

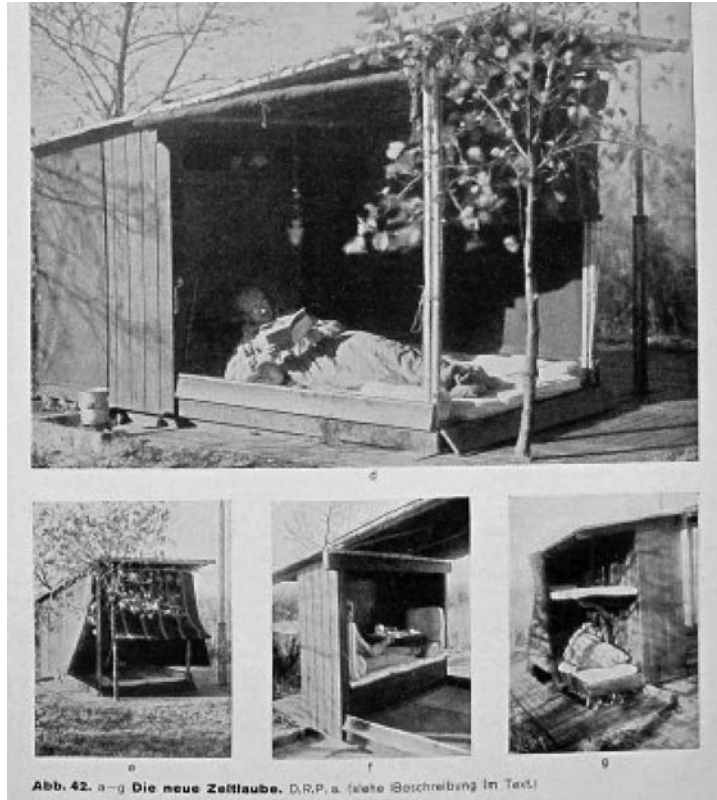


図5 ヴォルプスヴェーデの入植者学校で開発された「テント式小屋」Die wachsende Siedlung nach biologischen gesetzen, 1932, S.63 より
「成長する家」のミニマルなモデルともいえるこの小屋はゾンネンインゼルにも持ちこまれた。写真中で寝起きしているのは、ミッゲ自身である。

1929) が、生物が持続的に棲息可能な最小単位の環境を指すために「生物棲息空間」「生物空間」の意味で使い始めた言葉³⁸⁾で、現在では自然の中に存在する生物の生息する環境を指すだけでなく、人工的に設けられた小規模な自己完結した植物や生物の生育場所を指すこともある。人間もま

た生物として自然の中で生物学的循環の中に取り込まれているとするラオール・フランセの考えにしたがえば、ミッゲがたどり着いたゾンネンインゼルを、ひとつのビオトープと呼ぶことは許されるだろう。

38) ビオトープの造語と用法の由来については、佐藤恵子「『ビオトープ』はヘッケルの造語ではない！ ヘッケルとダーウィンの原典に基づく『ビオトープ』という言葉の由来についての検討」東海大学総合教育センター『総合教育センター紀要』2008年 33-43 頁